第3種郵便物認可　H17.11.6　朝日新聞

農家直伝の技 途上国へ

甘楽で半年修行

最終報告会で「この経験を現地でもいかしたい」などと抱負を話す青年海外協力隊候補生ら＝甘楽町文化会館で

青年海外協力隊候補生6人

開発途上国を支援する国際協力機構（JICA）の青年海外協力隊候補生6人が4日夜、甘楽町での半年間に及ぶ農業研修の最終報告会をした。この研修は、隊OBが窓口になり、町や地元農協、各農家が一体となって協力したことで実現した。JICAによると、OBが地域をまとめ、研修を実施するのは珍しい試みだという。

来年4月、旅立ち

OBはNPO法人「自然塾寺子屋」の矢島亮一理事長(41)。隊員として98年から2年間、パナマに派遣された。現地での農業支援の経験をいかそうとNPOを立ち上げた。甘楽富岡地域を拠点に、開発途上国の農業研修者を受け入れるなど国際協力活動をしている。

矢島さんは、今回の研修をJA甘楽富岡の生産者農家に依頼した。朝採り野菜を首都圏のスーパーで直売するなどの実績を見込んだからだ。候補生らは同JA秋畑支所の研修施設に住み込んで、農家に自転車で通った。

アフリカのマラウイに行く東京農業大学4年の山本作真さん(22)は「勉強の知識はあったが、種まき一つでも植える時期が重要なことがわかった」と話す。

農家側も長期間の受け入れは初めてだ。ナスやレタスなどを栽培する野菜農家の田中純一さん(56)方には、依岡亨人さん(24)が研修に入った。夏は暑くなる前に朝採り野菜を出荷するため午前3時半起き。依岡さんには夏の間、自宅に泊まってもらった。田中さんは「おれらが海外に行って協力できないから、教えた子が行って教えるのはいいことだ。技術より近所の人間関係に重点を置いた」と話す。

JICA農業技術顧問で東京農大の岩渕修一教授は「農家や地域との交流ができている点がとても